

## I 提案のコンセプト

### 1 資産名称・概要

#### 1) 名称

#### 金と銀の島、佐渡 ー 鉱山とその文化 ー

#### 2) 概要

佐渡島には、中世以来の金銀山が全島に数多く分布し、産出量のみならず、技術面においても、我が国の貴金属鉱山を代表する存在であり続けた。16世紀に大陸からもたらされた「灰吹法」の技術は、まず石見銀山に根付き、17世紀の佐渡において採鉱から精錬に至る一連の工程に組み込まれることにより、当時としては最も進んだ効率的な金銀生産システムを確立させた。さらに、この技術及びシステムは国内各地の鉱山へと伝播し、佐渡は日本の鉱山開発を発展させる拠点として重要な役割を果たした。また、明治時代には国策により欧米の最新技術が導入されたが、佐渡では既に確立していた生産システムを基盤に日本で最も早い鉱業の近代化が急速に進められ、それらは国内をはじめ東アジアの鉱山開発にも大きく寄与した。

このような歴史の痕跡は、現在も佐渡島内に遺跡や記念工作物などとして良好に遺存し、400年以上にわたって継承された鉱山の技術と経営の変遷を明瞭に示すとともに、離島という特殊な環境から鉱山に関連して形成された独特の土地利用形態を表す景観や伝統的な文化が継承されている。佐渡の金銀山遺跡とその関連資産は、貴金属の採掘技術と鉱山経営の歴史のみならず、その構造のすべてを典型的に示す事例として世界的にも希有な存在であり、顕著な普遍的価値を持っている。

佐渡には、金銀鉱山が広く分布している。西三川砂金山遺跡、鶴子銀山遺跡、新穂銀山遺跡、相川金銀山遺跡の4つの鉱山遺跡を中心に、鉱山技術の初期の時代から最も近代化された時代まで、そのすべての歴史と関連文化を今なお見ることのできる希有な島が佐渡である。

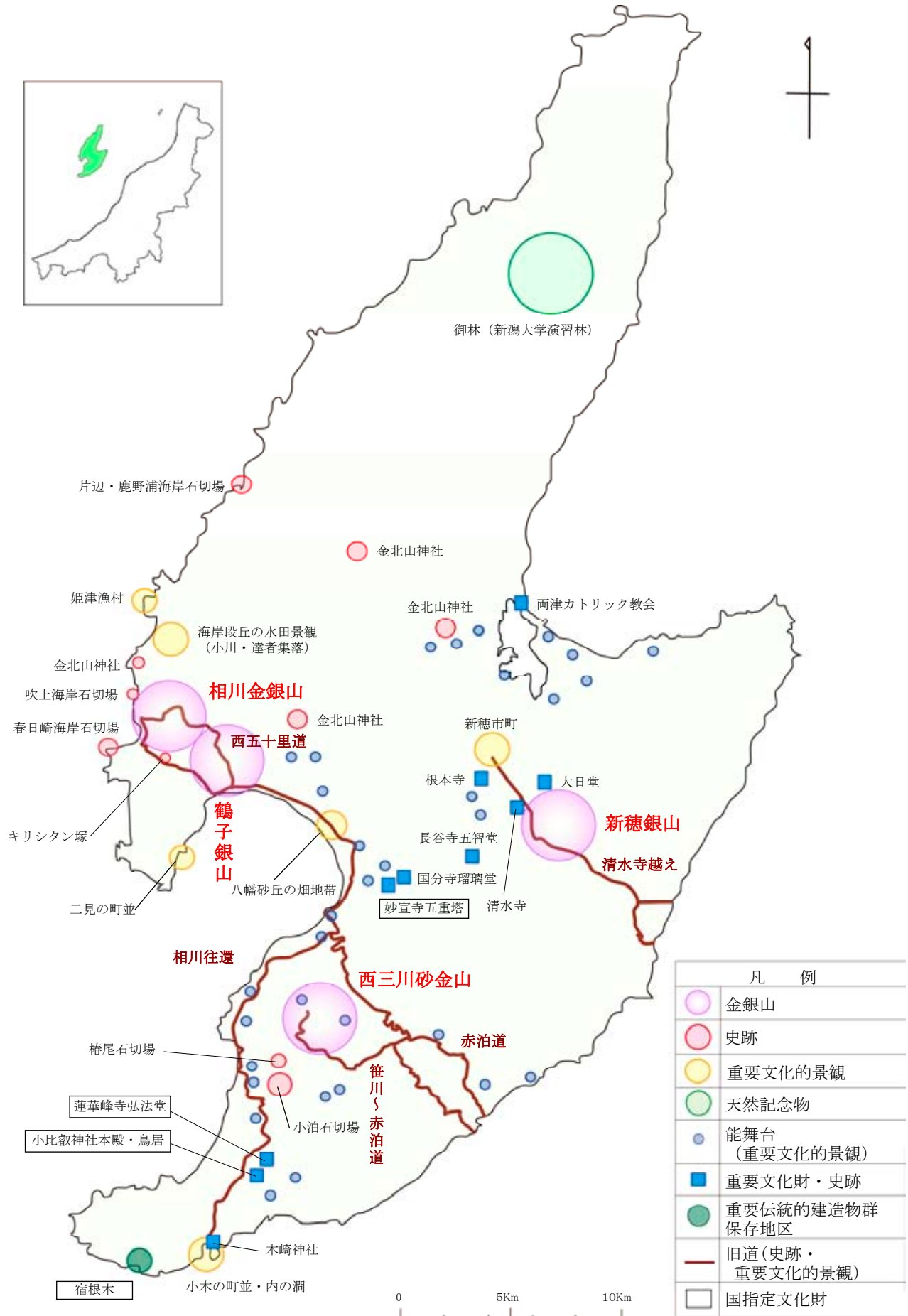
佐渡が「金の島」として歴史に登場するのは11世紀末の『今昔物語集』に始まる。古くは西三川で砂金採取が行われていたが、鶴子銀山や新穂銀山の露頭掘りの時期を経て、相川金銀山の発見で最盛期を迎える。佐渡の豊富な金銀は豊臣秀吉や上杉景勝の軍資金となったが、その後、徳川幕府によって天領となった佐渡の存在は、金銀山から生み出される圧倒的な経済力のゆえに、わが国が東アジアにおいて二百余年にわたって平和裏に鎖国体制を維持できた要因の一つとなった。

相川金銀山には石見銀山などを經由して大陸から伝来した「坑道掘り」「灰吹法」などの最先端の技術が導入され、江戸時代初期には世界の産金量の実に5%にあたる年間400kgという、世界有数の産出量を誇った。それは佐渡で開発された作業の分業化と系統化による金銀生産システムが確立したことによる。これらはさらに、18世紀半ばには奉行所に併設された「寄勝場」によって完成し、近代にも通じるシステムとなった。

明治時代には、欧米の技術導入により政府の数少ない模範鉱山としての官営化が行われたが、急速な近代化の成功は近世に確立されていた生産システムによるところが大きい。こうしたシステムは近世から近代にかけて国内及び東アジアの各鉱山に大きな影響を与え、佐渡は鉱山国日本を代表する鉱山であり続けた。

鉱山の開発が進むにつれ、各地から山師や金掘り大工などが集まり、17世紀前半の最盛期には相川の人口は5万人に達したとされる。相川では計画的な町づくりが行われ、当時としては世界的に類例をみない大規模な臨海鉱山都市としての景観を形成した。奉行や金銀山開発によって富を得た山師たちが、鉱山の繁栄を願って競って寄進した根本寺・長谷寺・蓮華峰寺などの伽藍や石造物が島内各地に分布し、鉱山経営と関連する寺社には、「やわらぎ」などの金銀山の繁栄を願う神事芸能が伝承されている。さらに鉱山と関連した生業に関する土地利用の実態が海岸段丘の新田開発や石切場、鉱山集落などの見事な景観として残されている。無名異焼・裂織・蠟型鑄金など鉱山と関連する技術も数多く伝承されており、このように金銀山は島内の広範な文化面にも影響を及ぼしてきた。

## 2 資産位置図及び資産全体の包括図



ly

lz

ly

lz

ly

lz



